

2021年4月18日 礼拝説教要旨
詩編講解説教57「救いに目覚めよ」
詩編57：7～12、Iコリント15：20

詩編第57編の表題には「ダビデがサウルを逃れて洞窟にいたとき」(1節)とあります。ダビデが洞窟に隠れた話はサムエル記上第24章に出てきます。この時のダビデは洞窟の暗闇の中でじっと息を潜めてサウルが過ぎ去るのを待っていました。一方のサウルは選りすぐりの兵三千を従えて、ダビデを追い詰めています。ダビデとすればもはや八方塞がり、絶体絶命の状態です。わたしたちも人生の中で、暗い穴の中に落ち込み、八方塞がりのように感じるようなことがあるかもしれません。今のコロナ禍もそうかもしれません。ワクチンが行き届かず、なかなか明るい兆しが見えてきません。それよりも先行きの見えない深い闇に落ち込んでいるように感じている人は多いと思います。健康の不安、生活の不安、あらゆる不安を抱えながら、今は息を潜めるようにしてじっと耐えているのが実情でしょう。

しかし、こういう人間の力が及ばなくなったところ、そこからが信仰の出番なのです。そこからがむしろ信仰の領域であり、信仰に生きることの本当の意味が見えてくるのです。パウロが「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」(IIコリント6：2)と言った時、彼は同じ手紙の中で「苦難、欠乏、行き詰まり、鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓」そういう状況にあったと伝えています。いよいよ人間の限界を感じて愕然とする時、でもそれが「恵みの時、救いの日」と言い切れる信仰にわたしたちは生きています。それを知らなかったならば、信じる意味はないと言わなければなりません。

わたしたちには人生でどうにもならない時が必ずあるのです。その時に信仰者は言います。「神さまにゆだねましょう」「祈りましょう」それは逃げているものではありません。諦めでも気休めでもありません。信仰に望みを置くのです。そこに最善のことがあると信じているのです。だからこそわたしたちは再び立ち上がることができる。それが信仰の力です。そしてそれがよみがえりの命を生きるということです。絶望の淵に希望の光を見る。キリストの十字架とよみがえりの御業がそれを可能にします。この57編にも、その信仰の飛躍が見られます。今日はそれを確かめておきましょう。

この八方塞がりの中で詩人は言います。「わたしの魂は屈み込んでいました」(7節)と。これは力なくうなだれること。人間の限界がそこにあります。しかしまさにそのところでこの詩人が見ているものは、天の輝きでした。「神よ、天の上に高くいまし、栄光を全地に輝かせてください」(12節)これは6節にも繰り返されています。この繰り返しは、絶望の中で、天、つまり神さまのご支配、神さまの栄光にわたしたちの目を向けさせています。これがとても重要なことです。わたしたちの目がどこを見ているのか。ともすると問題の渦中であって、それだけに終始してしまう。そして勝手に八方塞がりだと思込んでしまうのです。けれどもわたしたちは天に目を向けることができる。そこでこそ「あなたの慈しみは大きく、天に満ち、あなたのまことは大きく、雲を覆います」(11節)このことにわたしたちは気づくことができます。

「慈しみ」(ヘセド)がここにも出てきました。これは決して変わることはない神さまの救いの約束のことです。神さまはその契約を決して破棄されない。それほどに神さまの恵み、慈しみは限りない。まこと、真実は限りない。何よりもそのことをわたしたちはイエス・キリストの

救いによって知っています。どんなに魂が地に伏したような状態にあっても、キリストは十字架で陰府にまで降られ、この地に伏した魂をそこで受け止めてくださいました。そしてよみがえりの命をもって、この魂を天の輝きの中に引き上げてくださったのであります。

どんな困難の中でも、暗い穴の中に潜むような、そこでじっと息を潜めて耐えているような時でも、この救いを見失わないこと、それが今日のところで繰り返されます「目覚めよ」(9節)という言葉に込められています。目覚めるというのは救いに対して目覚めている、明るいということです。それが天に目を向けるということであり、それがこのような困難な時代を耐える力になります。今は暖かくなり一年でも気持ちの良い季節です。「春眠暁を覚えず」と言いますが、夜が明けたことも知らずに眠っている。比較的年の若い人たちはそうかもしれません。しかしこと救いに関してはそうであってははいけません。誰よりも救いの夜明けに対して敏感でなければなりません。いち早く夜明けに気づいて、その光を感じ取ることが大切です。

古来、人々は夜の帳を開け放つ曙の光に神秘の力を感じていました。現代人はそういう感覚があまりないかもしれませんが、けれども例えば山に登ってご来光を仰ぐということがあります。初日の出を見に行く人も多いでしょう。それは日本人だけの風習ではありません。神学校を卒業する時に聖地旅行に行きました。エジプトからイスラエルへ、出エジプトのルートを辿る旅をしました。途中シナイ山に登りました。夜の暗いうちに麓のホテルを出発して山頂で日の出を待つ。同じように日の出を待つ人たちが世界中からたくさん集まっておりました。そのうちだんだんと地平線が赤くなってきます。昼間はゴツゴツした岩場、荒涼とした砂漠地帯、山岳地帯ですが、その周辺の山々が朝日を受けて様々な色に変化していきます。紫のような、何とも表現できない景色に、神秘を感じました。どこからか讚美歌が聞こえてくる。瞑想に耽る人たちもおります。おそらく詩編の詩人もそういう景色を知っていたのかもしれませんが。「曙を呼び覚まそう」(9節) 早く夜の帳が下りて朝を迎えたい。夜明けは死の終わり、命の始まりを感じさせるものです。それを知って安心したい。わたしたちもその救いの夜明けを知っています。それがキリストのよみがえりの出来事です。

十字架の死の直前、ゲッセマネの祈りの時に弟子たちは眠りこけていました。主イエスに「目を覚まして祈っていなさい」と言われても眠ってしまう。どうしてこんな一大事に眠っているのか何度読んでも不思議ですが、それが神さまの救いに対して鈍い、目が開かれていないわたしたちの罪の姿であることが示されています。けれどもそのようなわたしたちのために主は十字架におかかりになられ三日目に復活された。それは「週の初めの日の朝早く」であることを福音書は伝えます。それは偶然ではありません。キリストのよみがえりこそ死の闇の終焉、命の光の始まりを意味しているのです。人生において、この夜明けを感じているかどうかは大きいのです。どんなに世界が暗く感じても、わたしたちはキリストのよみがえりによって、救いの夜明けを知っています。その魂はすでに陰府から引き上げられ、天の栄光の中に移されているのです。その光を感じながら歩む時、「明日世界が滅びるとも今日わたしはりんごの木を植える」(ルター) そういう生き方ができるのです。